

農村と都市の一体化過程

——田園都市からメガロポリスへ——

伊藤 章

本稿は農村と都市の一体化についての諸文献を、一九世紀後半の小さな農村都市連続体である田園都市から、最近の巨大な都市農村連結体である *Megapolis* (巨帯都市) への展開で取りまとめたものである。

一、田園都市

イギリスの E・ハワード (E. Howard 1850-1928) は一八九八年「*Tomorrow—真の改革にいたる平和の道*」を出版し、一九〇二年に「明日の田園都市」という書名でほんのわずかの改訂を加えて出版した。ハワードはすでに一八六九年アメリカのロングアイランド (ニューヨークの郊外) に田園都市と名づけられた都市があることを知らず、一九〇〇年までにアメリカで田園都市と名付けられた九つの村と一つの町があったことも知らなかったのである。そして「田園からなる都市」と同様に一つの「田園の内にある都市」を意味するものとしてこの名前を選んだ。しかし彼の著作でこの述語が世界に通用するようになったのである。ハワードと協議の上、一九一九年には田園都市及び都市計画協会によって一つの短い定義が採用された。「田園都市は健康的な生活と産業のために設計された町である。その規模は一つの社会生活を十二分に営むことが出来る大きさであるが、しかし大きすぎることなく村落地帯で取り囲まれ、その土地は全て公的所有であるか、そのコミュニティに依託されるものである。」⁽¹⁾

ハワードに代表されるイギリスの思想は工業と住居と店舗その他の社会施設及び田園的環境を結合することによつ

て、その内で社会生活の遂行が可能である一つの新しい社会を作ろうとするものであった。それは郊外住宅地の発展とは正反対の立場に立っている。こういう意図というものは大都市住民の生活状態の改善にあったのであった。このニュータウンは一九六五年までに二一作られているといわれる。⁽²⁾

二、衛星都市

近江哲男氏⁽³⁾によると衛星都市は都市計画上の用語であり、G・R・テーラー(G. R. Taylor 1880～)が二〇世紀の初めアメリカの大都市の郊外に発展しつつあった工業都市をこのように名づけたのが最初であるといっている。しかし他の説⁽⁴⁾によれば衛星都市はグレート・ブリテンにおいて、一九一九年に初めてウエルウィン田園都市——その規模において、分離状態において、レイアウトにおいて、構造において、地方的雇用の基盤において、真の田園都市——のもう一つの説明として使用されたといわれる。この新しい述語を採用した理由は、第一に田園都市を宅地の多い郊外もしくは田園郊外と同じものを意味する説明が広く行なわれたこと、第二にはグレートロンドンとの特別な経済的つながりのあることを認めたからである。

それはともかくとして一九世紀の初頭、大都市の発展にともない、市内の工業は企業自体従業員の福祉などのためにも市街地の密集状態から周辺地域に移動し、工場その他の生産施設と、従業員の居住施設及び消費施設などの生活を営むにたえる各種の社会施設を持つ政治的にも大都市から独立した一個の都市などを建設する傾向が顕著となっていたのである。⁽⁵⁾この衛星都市の建設はハワードの田園都市の思想に刺激されたものであり、この思想を生んだイギリスにおいては理想的な衛星都市は同時に田園都市でなければならないとされていた。

社会的に見ると衛星都市(田園都市)は大都市と社会経済的に密接な関係を有する一都市として概念づけられるであらう。その内で住民の日常的な生産及び消費生活が完結する一単位の都市を構成しているという点で単なる郊外住

宅地帯とは異っているのである。

三' Rural Community (都市農村共同体)

この田園都市、衛星都市が話題になっていた二〇世紀初頭、同じアメリカでその農村における地域社会 (Rural Community) の基本的単位は何かという研究がはじめられていた。これは田園都市のように新しく作るものではなく、都市、農村一帯化の研究となつたのである。これは一九世紀末から二〇世紀初めの農村問題の発生と重要な関係があつたのである。

二〇世紀初めまでアメリカにおいて村落＝農村市街地 (village) の人々だけが農村において唯一の地域社会を作つていてと考えられていた。このビレッジは田舎町のことであるが、それには明瞭な地域的な境界もあり、諸々の社会統制の機関もあつた。しかしこのスモール・ビレッジを取りまいて広く散在している農場の人々はお互いに無関係であると思われていた。もちろん行政上の区分はあつたが、それは人為的なものであつた。それでは農場に住む農民はお互いに孤立し、社会的接触がないのか、社会関係の糸を綿密にたどっていけば彼らの間にも地域的集団があるのではないかと考えるにいたつた。ここにいたつて、実際の社会関係を調査し、この関係をつなぎ合せて、自然な無理のない地域社会の区分をしようとする方向に学者が動いていったのである。この目的のために最初に行なわれた重要な調査は一九一〇年にC・J・ギャルピン (C. J. Galpin 1864～1947) がウィスコンシン州、ウォールワース郡で行なつたものである。彼がその結果導き出した "Rural Community" という概念はすばらしい発見であつた。⁽⁶⁾

それでは "Rural Community" とは何か。農村地方 (District) には金融機関や商工業があり、学校や教会や図書館があり、その周辺の農場の中心となつている普通人口三〇〇人ないし二、五〇〇人の村落 (village) とそこを中心としてそのようなものを利用している農場とがあるが、これらの社会関係をギャルピンは調査し、この関係を保

っている地域内の農場と村落によってできている社会をギルピンは“Rurban Community”と呼んだのである。そしてその範囲はその内の人々が互いに接触し利害をともにし、互に面識しうる最大限の地域であると見たのである。この発見で人々は今までわからなかった農村における基本的地域社会がはじめて示されたと考えた。しかしその後の調査の結果、農村生活はそれほど村落を中心にしていない場合もあることがわかってきた。それで村落に結びつけないで、農場の農民自体の間の地域的社會關係があるかどうかが次の問題となったのである。このようにしておこったのが近隣の概念であった。

さて以上述べた所の“Rurban Community”や近隣 (Neighborhood) の調査研究は“Rural Community”の発見のためであった。それならばこの近隣をもつて果して“Rural Community”といふことができるか。一般に漠然と共同生活の範囲をもつて“Rural Community”とみなしたのであるが、具体的には共同生活の意味は明確ではなかった。幾多の論争の結果、農村共同社会は次のようなものであるとされた。

「農村におけるかなり広い地域にわたって自分達の集団を多少自覚した一団の人々の人間的関心の重なるものの大部分、あるいはすべてが共同の中心、あるいは数個の中心において統制されているものである。」

それでは近隣は共同社会であるか否か。たしかに近隣のあるものは共同社会の性質をそなえている。しかしそれは比較的例外であつて、大部分の近隣はそうではない。それで共同社会と近隣を峻別するものがあらわれた。K・L・バターフィールド (K. L. Butterfield) によると「近隣は便宜上近くに居住しあっている一団の家族に外ならない。近隣もずい分大きな役割を持っているが、それは断じて共同社会ではない。真の共同社会は多少とも自給自足的でなければならない」とい⁽⁷⁾う。しかし研究が進むにつれてこの区別を困難と見る学者も出てきた。E・D・サンダーソン (E. D. Sanderson 1878~1944) は次のように両者を区別する。「我々がすでに認めている近隣と共同社会の区別に対する唯一の原理は近隣に住む人々の利益は近隣そのものよりも共同社会の機関及び生活によって多く提供され

ているということである⁽⁸⁾」

以上多くの実証と論議の結果、農村共同社会を結局“Rurban Area”であると見るにいった。すなわち農村共同社会は農村住民の必要なものを提供している機関によって統制されているような地域と見ているのであり、同時に近隣とは一つか二つの関係をとりまいて個人的接触が行なわれているような基本的地域社会である。すなわち農村共同社会は結局ギャルビンのいわゆる“Rurban Community”に外ならなかったのである。

一般に農村共同社会という場合には何物かを共同している人々の社会という意味であるが、共同すべきものがこの場合には特に規定されている。すなわち生活の共同、社会生活における重要な関心の大多数の共同である。しかしそれではあまりに抽象的であるから、具体的に表現しなければならない。これについては論争があるが、一般に学者は“Rurban Community”は“Trade Zone”すなわち日用品購入の村落を共同にしている農場の圏をもって定めている。

以上のような農村共同社会研究の出現を見た一九二五年ごろを中心としてアメリカの農村社会学は科学的研究へ移行したといわれるのである。

さて、日本の場合にも田舎町とその周辺農村を含めてこのような地域を見出すことは困難でなく、鈴木栄太郎はこれを「関心共同圏」と呼んだのである⁽⁹⁾。

その後、農村社会は激しい変化を遂げるのであるが、なかでも交通手段（特に自動車と公道）のめざましい発達は地域社会の様子をばげしく変化させた。それらについて詳しく説明することは省略するが、かつてE・D・ブルーナー（E. D. Brunner）は一九三〇年の動向によって農村市街地の二つのタイプ、つまり農民が近くの土地において得ようとする学校、教会などサービスセンターたる農村市街地と、より多くのサービスをより広い地域に及ぼすマーケットタウンに発展する人口二、〇〇〇人以上の大きな中心（農村市街地）の二つがはっきり区分されるといふ予想を

たてていたのであるが、それがほぼ実証されたようである。⁽¹⁰⁾

以上大都市とそれに関連する衛星、田園都市及び“Rurban Community”について述べたのであるが、それと並んでアメリカの社会学の典型的な考え方である都市Ⅱ農村二分法と、それを一つの連続線上で考えようとする都市Ⅱ農村連続体説がある。そこでこの後者の連続体説について述べておこう。

四、都市Ⅱ農村連続体説

この理論は種々の段階の地域社会を一つの連続線上でとらえるものである。この方法が考えられた現実的基盤はもちろん都市化の進展にあった。この方法論に理論的基礎を与えたのはL・ワース (Louis Wirth 1897~1952) である。彼は「都市と農村はあらゆる人間の定住形式が自分を一方から他方へと配列する所の二つの極 (Pole) と考えられる。コミュニティの理論型として、都市Ⅱ産業社会及び農村Ⅱ習俗社会を考えることによって、我々は現代文明の内にあらゆる人間統合の基本的モデル分析の見通しを見ることが出きる」と述べて、都市Ⅱ農村間に連続性があると考へたのである。⁽¹¹⁾

その連続指標は人口量、人口密度、人口の異質性である。その結果、都市とは社会的に異質な人々が作る比較的大きく、かつ密度の高い、そして永続的な定住形式ということになる。このように都市と農村の差は三つの指標の程度の差となり、これらの指標の程度が高まれば高まるほど都市的となり、その逆は農村的となる。

H' Rural-Urban Fringe

以上二つの議論は都市化の進展と関連していたが、その都市化と関連して更に一九三〇年代にあらわれた新しい研究はRural-Urban Fringe (都市Ⅱ農村接触地帯) の研究である。これは連続体説と無関係ではないが、これは兼業

農家の研究からはじまったといえる。一九三〇年代のはじめの経済恐慌によって都市労働者は大きな打撃を受けたのであるが、この打撃を緩和する可能性が兼業農家にあるのではないかと考えられた。そして、この経済恐慌の打撃を緩和する可能性のある兼業農家の研究が各地で行なわれた。それがさらに発展して大都市に接続する農耕地域に注意が向けられた。農村地域から都市工場への通勤が交通の発達によって可能となったことにより、一九三四年ごろから郊外化 (Sub-urbanization) に関する研究が進展した。特に一九三六―三九年にわたってなされた N・L・ウェダ (N. L. Whetten) のコネチカット州における郊外化の研究はその代表的なものであった。⁽¹³⁾

はじめ郊外化の進んでいる地域を Suburb と呼んだり、Rurban zone という者もあったが、第二次大戦後は Fringe という言葉が一般的になり、社会学者の間では都市Ⅱ農村接触地帯と呼ばれるようになったのである。この問題を最初に手がけたのは人間生態学者であり、つづいて都市社会学者及び農村社会学者がその研究に参入した。このような事情は都市と農村の関係を二分法 (dichotomy) と考えるか、連続体 (continuum) と考えるかに対して新しい問題を提起した。同時に Fringe は都市Ⅱ農村の交錯であるか、その中間に位するものであるかという問題を提起したのである。⁽¹³⁾

この RuralⅡUrban Fringe の研究としては我国では八木佐市「RuralⅡUrban Fringe について」(広島大学政経学会「政経論集」第七巻第二号―三号、一九六二年五月)がある。

森岡清美氏の「米国社会学における Fringe Family の研究」によると Fringe の研究が途方もなく多いこと、また多方面にわたること、その上同じ現象に関する調査結果が A 市と B 市の近郊によって異なるだけでなく、同じ A 市の近郊でもその場所がちがえば同じでないことが明らかにあり、ある方向を見出すことは困難である。森岡氏によると Suburb (近郊) は中央都市の経済生活の内に統合される通勤可能な範囲である。ただ中央都市とは行政区画の上で区別される地域であると規定している。Fringe は都市の周辺にあって都市的土地利用と農村的土地利用の混在す

る地域である。したがって Suburb と Fringe は同位概念であって、異なる所では Fringe は Suburb のさらに外側に展開するということである。であるから両者を相互排他的に理解することもできるが、少なくとも部分的には重複するものと考えられることもできると述べている。⁽¹⁴⁾しかし後述する大都市の連鎖体の成立は、この問題をミクロの問題としたのである。

さて、一九世紀の都市化は散在的な都市の発展をうながしたにすぎないといわれているが、二〇世紀の都市化 (Urbanization) 、巨大都市化 (Metropolitanization) は巨人都市または巨大都市を創造したといわれる。この巨大都市は過去の都市とは異って都市の外部への拡散という非常に強い傾向をもって、多くの人口を都市人口としたのである。この意味で巨大都市化は一九世紀の都市化とは質的に異ったものといえる。このことは第二次大戦後、日本を含めてであるが世界的に顕著に見られる事実である。

先に衛星都市は大都市と密接な関係のある都市であり、ここでは住民の日常的な生産及び消費の生活が完結すると述べたが、大都市との間の密接な社会経済的な関連については何らふれなかった。それは第二次大戦後では一般地方都市も大半が同様な性質を持つようになっており、衛星都市ということでは他から区別することが困難になってきたからである。したがって大都市とその Metropole (Metropolitan Area) 及び地方都市という概念でとらえるという考え方が出てきたのである。⁽¹⁵⁾

六、Megalopolis

以上述べた巨大都市の都市化の進展による巨大都市 (Metropolis) の連鎖体、結合体を Megalopolis と名づけたのが地理学者 J・ゴットマン (Jean Gottmann 現オックスフォード大教授) の著書の「メガロポリス」(一九六二)⁽¹⁶⁾である。もちろん Megalopolis という言葉は古代ギリシャ時代からあった。プラトンは都市の理想的な大きさとし

て人口は七の階乗すなわち五、〇四〇人が適當であるとしたが、これは演説する政治家の声の届く範囲の数でありいわばそれ以上が *Megalopolis* であった。しかしゴットマンのいう *Megalopolis* は彼がプリンストン大学の招きでアメリカの都市化を研究していたとき、ボストンからニューヨークをへてワシントンまでの大都市圏の連続した都市化地帯をさして名付けたのである。ゴットマンのその本にはニューヨークを中心とする人口三、七〇〇万人（一九六〇年）、面積一、三九〇万ha（人口密度二六六人）の地帯がその研究対象として取り上げられている。この地帯はニューヨーク、フィラデルフィアをへてワシントンにいたる長さ一、〇〇〇km、幅五〇～一〇〇kmにわたっている。その内には大・中・小都市、工業地帯、商業地帯、官庁地帯、学園、スポーツ、レクリエーション地帯、山村地帯、園芸農園、農場、牧場地帯がある。それらを連結して一つの巨大な都市農村連結地帯としてゴットマンはえがいているのである。彼は *Megalopolis* を、(一)人口二、五〇〇万人以上の都市人口が高密度に集中している、(二)多数の大都市の集合体、(三)多量の物質や情報の地域内流動などの特色をあげ、最高の繁栄を誇る都市化地帯と考えたのである。ゴットマンが「メガロポリス」を発表したころ米国では工業化による大都市化が頂点に達していた。都市化によって経済は成長し、国民は豊かな生活ができるようになっていた。しかしその後、都市化は一段落し、脱工業化社会へと進み出した。すると人々は高い人口密度で、そこに住んでいる人々に画一化を要求する大都市に耐えがたい思いを持つようになった。裕福な人々の内にはそこから逃げ出し、他の比較的人口密度の低い都市へ移りはじめた。工業化時代には農村から都市への人口移動がつづいたが、脱工業化時代を迎えると人口移動の八〇％は都市間の移動にかわってきた。一九六〇年から七〇年までの間にゴットマンが指摘したアメリカ北東部大西洋岸のボストンからワシントンまでの *Megalopolis* は唯一の人口集中地帯ではなくなった。新たに太平洋岸のカリフォルニアからロスアンゼルスをつつみこむカリフォルニア地帯や、シカゴ、デトロイトのならば五大湖沿岸、フロリダ半島などに各々新しい人口集中地帯が生れたのである。 *Megalopolis* が各地に形成されはじめたのである。イギリスや欧州大陸でも多くの人口が集

中している Megalopolis が形成されてきた。イギリスではイングランドのマンチェスター、リバプール、ロンドンをつなぐ広大な地域、欧州大陸では北西部のオランダから西ドイツ、ベルギーをつなぐライン川とその支流沿いに形成されている。イギリスと欧州の Megalopolis の状態は日本の場合とよく似ているようである。国土の面積は狭い上に都市への人口集中が進んでいるということである。イギリスの Megalopolis 人口はアメリカと同じ、三、〇〇〇万人であるがアメリカでは全人口の $\frac{1}{4}$ 位なのにイギリスでは $\frac{3}{4}$ を占めている。イギリスでもアメリカと同じく人口は分散しはじめたがその速度は遅く、欧州大陸はさらに遅いといわれている。

日本はどうかという一九六〇年代の前半から「東海道 Megalopolis」の構想がクローズアップされてきた。東京周辺の南関東、名古屋中心の東海地帯、大阪・京都・神戸をとりまく近畿地帯、それらを合わせた土地面積五九〇万 ha 昭和四十五年の人口五、三〇〇万人の Megalopolis が存在する。日本経済の高度成長が南関東・東海・近畿の諸地域に異常ともいえる人口集中を惹起した。この人口集中地帯を「東海道 Megalopolis」と呼んだ。このまま人口集中が続くと日本人人口の七割が東海道 Megalopolis に住むといわれている。

さて、ゴットマンのいうような Megalopolis というような状況となれば農業者も一種異様な社会的状況の内におりこまれて来ざるをえない。農民魂も土地に対する強い意識というものがうすれて流動性を高めてくるし、農業も多様な展開の可能性をあらわしてくる。土地を耕す者特有の個人主義的な考え方なり行動様式がうすれて、本来の個人主義が確立するようになり、都会人と共通の一般性を持つようになってくる。同じようなスタイルで通勤し、同じようなビジネスを持ち、同じような居住形式を持つということになり、きわめて同質的 (Homogeneous) な生活環境をかもし出すとともに、同一性を持つようになってくるのである。一方都会人も同時に農村に住むようになるので、土地を農家から借りアマチュア農業をやるようになる。そしてそこから都市の中心に出てビジネスにはげむようになる。⁽¹⁷⁾

以上ハワードからゴットマンへ——田園都市から Megalopolis へ——の概観をこころみた。それは個々には密接な関係を有しているとはいえないものもあるが、全般的には小さな都市農村連結地帯から巨大な都市農村連結地帯（すなわち Megalopolis）への変貌であった。しかしその中の中・小都市を個別にみると、都市的土地利用と農村的土地利用が混在しているところといえるであろう。

- (1) E・ハワード著、長 素連訳『明日の田園都市』鹿島研究所出版会 昭和四三年、三九〇四〇頁。
- (2) 同前、二六八～二六九頁。
- (3) 近江哲男「衛星都市」(福武直等編『社会学辞典』有斐閣 昭和三年) 五七頁。
- (4) 前出『明日の田園都市』四一頁。
- (5) 前出「衛星都市」五七頁。
- (6) C. G. Galpin "The Social Anatomy of Agricultural Community" 1915.
- (7) M. L. Sims "Elements of Rural Sociology" 1928, p. 582.
- (8) E. D. Sandersen "The Rural Community" 1932, p. 582~3.
- (9) 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』日本評論社 昭和一五年 四六五～五一四頁。
- (10) E. D. Brunner "Village Growth, 1940~50" R. S. vol. 16: 2 1951 p. 111~119.
- (11) L. Wirth "Urbanism as Way of Life" A. J. S. vol. 44. 1938. (日本訳あり)
- (12) N. L. Whetten "Studies of Suburbanization" R. S. vol. 12. 1947 p. 305~307.
- (13) 森岡清美「海外の動向——戦後のアメリカ農村社会学」(村落社会研究会編『村落研究の成果と課題』昭和一九年) 二二一～二二三頁。
- (14) 森岡清美「米国社会学における Fringe Family の研究」(国際基督教大学学報Ⅱ-A『地域社会と都市化』同大社会科学研究所 昭和三七年) 二九七～三三三頁。
- (15) 前出「衛星都市」五七頁。
- (16) Jean Gottmann "Megalopolis" 1961. (抄訳あり)

(17) 神谷慶治『日本農業の連続性』昭和三年、二九八～三二二頁。

(いとう あきら、本学教授)